第２部　文化的景観の調査報告

第１章　調査区及び地域の概況

第１節　調査区域　（事　務　局）
第２節　地域の概況　（事　務　局）
第３節　地域構造の変遷　（中山　昭則）

「別府八湯」位置図

【別府市ホームページ（http://www.city.beppu.oita.jp/02kankou/city-map.html）を一部改変】

第１節　調査区域

現在、別府市全体で約400か所の「湯けむり」が確認されている。

「湯けむり」は沸騰泉や噴気の凝結した細かい水滴であることから、源泉と密接に関係している。

源泉の形成には断層と火山活動が関係する。そのため、「湯けむり」も断層の付近で、かつ地熱の高い火山の麓に位置する鉄輪や明礬、堀田、観海寺、小倉などの地域に集中する。

「文化的景観　別府の湯けむり景観」では、最終的にこれらの地域を対象地域とし、景観の保存に取り組むことを予定している。

今回は、これらの地域の中から、「湯けむり」の約３割が集中し、最も歴史の古い温泉場である鉄輪地区と、「湯けむり」の約２割が集中し、自然湧出の「湯けむり」と湯の花小屋が独特な景観を構成する明礬地区を対象地域として取り組みを進めていく。

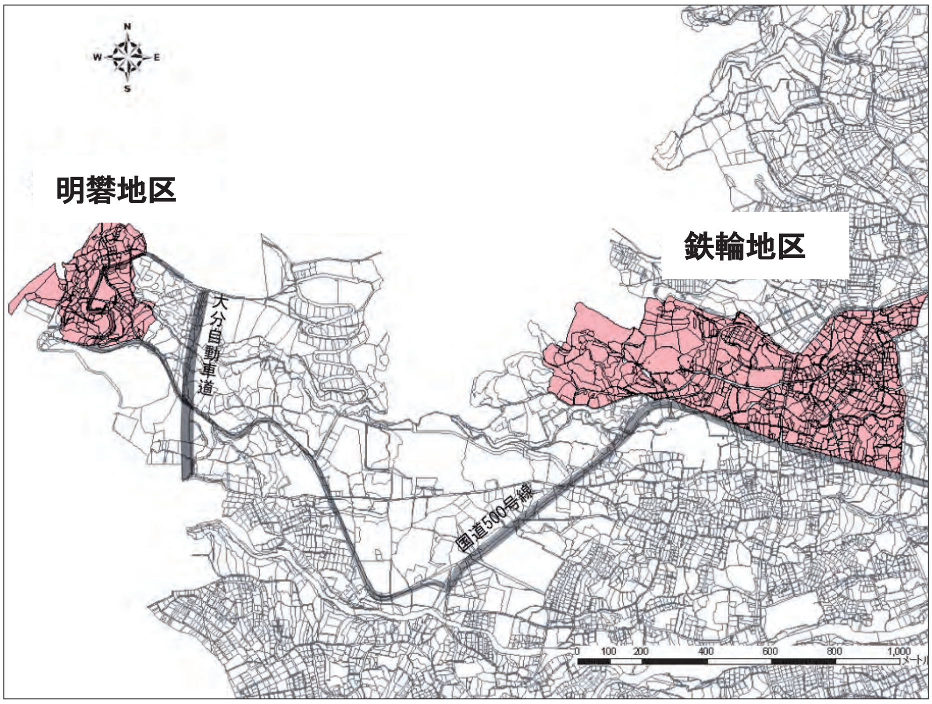

図1.1.1　調査区域図

具体的には、図1.1.1内の着色している範囲とし、明礬地区は旅館街を中心とした約９haを、鉄輪地区は大型の観光施設が立ち並ぶ沿道地域と湯治場の風景を残す地域からなる景観重点計画区域に「地獄」の関係する地域を加えた約36haを対象地域とする。

なお、この後の各分野からの調査報告については基本的に調査地域に関するものであるが、中にはより広範囲を対象とした報告もあることを予め述べておく。

第２節　地域の概況

１　別府市の概況

別府は、九州東部の国東半島と大分平野に挟まれた別府湾の最奥部に位置する、人口約12万人、面積125.38 km^{2}の国際観光温泉文化都市である。

北部の鹿鳴越山断層と南部の朝見川断層間の島原－別府地溝帯の東端にあたり、その間に亀川・鉄輪・堀田の各断層が存在している。市の西側背後には鶴見岳（標高1,375m）を主座とし、内山（標高1,275m）、大平山（扇山、標高792m）、伽藍岳（硫黄山、標高1,045m）などの火山群がほぼ南北に連なり、その前面に火山性高原が広がっている。その高原は河川の浸食により舌状台地を形成し、さらにここから東方の別府湾に向けて扇状地が広がり、そこに市街地が位置している。

国際観光温泉文化都市に位置付けられたとおり、別府市内では各地で温泉が湧出している。特に高度成長期以降は、別府・浜脇・観海寺・堀田・明礬・鉄輪・柴石・亀川の８つの温泉地を総称して別府八湯とし、それによ

る観光産業を基幹としている。地区ごとの概要については、以下のとおりである(明礬、鉄輪については後述)。

別府地区は湯脈や交通の便に恵まれ、明治４年の築港による瀬戸内海航路や鉄道の整備による交通網の発達の結果、海側（東側）に旅館街や歓楽街を形成し、山側（西側）に別荘地や保養所が形成された。戦後の経済の高度成長により別府市全体の発展を牽引する役割を担っていたが、近年の景気後退により商業地の衰退が見られ、再生に向けて取組が進められている。

浜脇地区は市の南端に位置する水陸交通の要衝である。中世には、府内（大分市）を拠点とする大友氏が館を構えたとされている。明治期には旅館街や歓楽街が形成されるなど、温泉地でも一番のにぎわいを見せていた。しかし、大正末期には温泉枯渇の危機がささやかれ、温泉の統合等が行われたものの、第２次世界大戦後の経済閉塞により、経済の高度成長から取り残される形となり、現在では再開発等の取組が進められている。

観海寺地区は別府地区の西側標高150～250m の高台にある。江戸時代には湯治場として知られ、旅館が建てられていたものの、昭和６年（1931）に大火がおこり、それ以前の旅館はほとんど焼失した。温泉の再建に伴い眺望を売りにした旅館も建てられるようになるが、戦時下には借下げや接収により仮病舎として用いられた。戦後はリゾートホテルや修学旅行生向けの宿泊施設など多様性を増したが、景気後退による経営難から再生に向けて取組が続いている。

堀田地区は観海寺地区からさらに西側の、大平山（扇山）の南斜面下に位置する。湯布院、日田、別府を結ぶ陸上交通の要衝であり、慶長５年（1600）の石垣原合戦に際して大友氏が本陣を構えていたとされる。江戸時代にはできものなどに効果がある温泉地として知られ、大正から昭和にかけて金田屋などの温泉に伴う旅館が有名であったが、瀬戸内海航路や日豊本線の全通など交通事情が変化した結果、市街地から隔たったこともあり衰退していく。現在は浜脇などに給湯する泉源として利用されるほか、九州横断自動車道のインターチェンジが近いこともあり、バリアフリーの市有市営温泉を再建築するなどの取組が続いている。

柴石地区は市の北側に位置する。狭い渓谷にあるため度々水害を被り、近代までほとんど知られることが無かった。昭和60年には鉄輪・明礬とともに温泉法に基づく「国民保養温泉地」になり、秘湯情緒溢れる温泉地景観づくりを目指して整備されている。

亀川地区は市の北端に位置する陸上交通の要衝で、古くから温泉地として知られていた。明治時代には浜脇等に比べると湯治客は少ない傾向にあったが、明治12年（1879）高橋増吉が浜田温泉の新規掘削に成功し、また亀川駅の開業に伴って旅館街が形成され、湯治客が増えた。その一方で、砂浜の埋め立て等により砂湯が無くなった。戦時中は海軍病院が設立され、傷病兵の保養所として機能していたが、戦争の激化に伴いベッドが足りなくなると、旅館の借上げにより、さながら一大医療地となった。戦後になると当初は温泉地としてにぎわったが、売春防止法の施行後は浜脇地区と同様に衰退する。昭和40年に太陽の家が建てられるなど療養地として知られる一方で、地元住民が自主的にまちおこしに取組んでいる。

これらの源泉は、断層と鶴見岳及び伽藍岳の２つの火山が影響し合うことから、概ね前述の断層付近と海岸沿いに集中している。したがって、源泉は扇状地上の市街地を取り囲むように所在し、扇状地の中央部及び山間部にはほとんど見られない。

平成20年３月末の統計資料では、源泉数は未利用の179か所も含め2,516か所で、日本の総源泉数の約10分の１を占める。湧出する湯量も毎分89,608ℓと日本最大である。泉質も鉱泉分析法指針に基づく提示用泉質11種類のうち10種類が確認されている。

別府では湯けむりが市内各所で高く立ち上っており、毎年春に野焼きを行う扇山や樹木豊かなその他の鶴見連山などの自然景観､旅館等の市街地を彩る都市景観を背景に独特の景観を形成しており､全ての人を魅了している。

この湯けむりは、沸騰泉や噴気から噴出した水蒸気が凝結した細かい水滴であり、もともと自然噴出するものであったが、観光業が発展する中で、温泉の掘削が行われ、噴出する数も多くなり、高さも増している。現在

は、別府全体で約400か所の湯けむりや噴気が確認されている。

温泉地別府としての記述は古く、８世紀の『豊後国風土記』で確認される。古代・中世より温泉の治療効果と神仏の信仰などが結びつく中で、当地は湯治場として成立していった。そのことは、江戸時代に記された貝原益軒や古川古松軒の紀行文でも見受けられる。明治時代に入ると、港湾整備が行われ、瀬戸内航路での往来が活発になり、近畿・中国・四国からの来湯客が増加、別府は観光地としての性格を強めていく。とりわけ、油屋熊八は旅館やバス会社などを創設し、地獄めぐりの観光ルートを設定するなど、宿泊から交通までの総合的な観光業を発達させた。大正後半から昭和初期には隆盛期を迎え、昭和25年には「別府国際観光温泉文化都市建設法」によって国際観光温泉文化都市に位置づけられ、高度成長期を経て、さらなる発展を遂げていった。現在でも観光業を中心としたまちづくりが積極的に取り組まれている。

２　鉄輪地区の概況

今回対象地域とする鉄輪地区は別府八湯の中で最も歴史の古い温泉場である。中世に一遍上人が蒸し湯を開発したと言う言い伝えもあり、現在は一遍上人をしのぶ湯あみ祭が開催されている。近代以降になると、湯治場として発達するとともに、「地獄めぐり」など観光地としても市街地が形成されてきた。現在は、国道500号沿いに大型の宿泊施設などが立地する区域がある一方で、古くからの湯治場や住宅地の中に地域の共同浴場が立地する区域がある。その西方には「地獄」が集中する区域もあり、噴気、熱湯、熱泥を地上にすさまじい勢いで噴出する独特の景観は与謝野晶子ら多くの文人墨客に描写され、平成21年には海地獄、白池地獄が「別府の地獄」として血の池地獄や龍巻地獄とともに国の名勝指定を受けている。

湯けむりについては、全体の約３割が鉄輪地区に集中しており、別府で最も多くの湯けむりが見られる地域となっている。立ち上る噴気は、古くから乾浴である「蒸し湯」や野菜や肉などの蒸し料理を作る「地獄蒸し」として利用されている。湯けむりが集中するようになったのは近代以降である。来湯客の増加と並行して、沸騰泉や噴気が当時は主に上総掘りで、現在は機械掘りで新たに掘削されたことによる。近年、この湯けむりを中心としたまちづくりが住民主導で行われている。

３　明礬地区の概況

もう一つの対象地域である明礬地区は、湯の花を採取するための藁葺き小屋（湯の花小屋）が立ち並び、独特の景観を構成している地域である。鉄輪地区に次いで全体の２割が集中している地域であるが、鉄輪地区がパイプから天高く立ち上る湯けむりが多いのに対し、明礬地区では湯の花小屋や国道わきの側溝や鶴見岳より噴出された角閃安山岩、いわゆる別府石の擁壁の隙間から低く漏れ上る湯けむりが多い。

湯の花は、江戸時代に製造されていた豊後明礬が明治時代に安価な輸入品に押され需要が低調になったときに、豊後明礬の製造法を利用して作られ、自然由来の入浴剤として愛用されるようになったものである。他の地域の湯の花が温泉の鉱物質を沈殿凝固させたものなどが多いのに対し、明礬地区の湯の花は、地域で取れる青粘土に温泉の噴気を当て、析出してきた結晶を鏝で削り取るという独特な製法で製造されたものである。そのため、湯の花小屋の近くには噴気孔があり、これを小屋全体に行きわたるように石造の硫気溝を埋設している。この硫気溝や噴気孔から湯けむりが立ち上り、湯の花小屋とあいまって、他の温泉地では見られない明礬独自の景観を形成している。この湯の花を製造する技術は平成18年に国の重要無形民俗文化財に指定された。

湯治場としても知られており、戦後は皮膚病患者が大勢湯治に訪れたという記録もあるが、昭和33年に大火で旅館や鶴寿泉が焼失するなどした結果、経済の高度成長期に取り残された。しかし、観光に自然環境等の癒しを求める傾向が強い現在では、それが幸いして自然環境が多く残る温泉地として評価されている。また、ザボン湯や地獄蒸しプリンなどの名物を作り、新規事業に挑戦し続けている。

第３節　地域構造の変遷

ここでは鉄輪地区ならびに明礬地区の地域構造の変遷を検討してみたい。地域構造とは事例地域の地形・植生といった自然環境ならびに土地利用・交通路・集落（市街地）の分布・配置からみた地域特性といえよう。地域構造の変遷を検討するにあたり、本稿では旧陸軍測地部および国土地理院発行の５万分の１地形図を用いる。用いる地形図は①別府市が温泉観光地として形成された明治38年（1905）、②温泉観光都市として華やかな展開を示していた昭和２年（1927）、③高度経済成長期の昭和45年（1970）、④バブル経済崩壊後の平成９年（1998）の状況について検討する。

ここでは、先ず、別府中心域における地域構造の変遷について検討を行い、その上で鉄輪・明礬両地区の地域構造の変遷を検討し別府温泉郷の中における両地区の位置づけの考察を行う。

１　温泉観光地黎明期（明治38年（1905）頃）の地域構造の変遷

まず、図1.3.1を見ると、いわゆる「別府の原地形」が見て取れる。境川と春木川は今日と同様大平山（扇山）から一直線状に別府湾に一気に流下していようである。それは僅か６km 程の長さでその落差は600m に及び、滝のような流路であったと考えられる。春木川中流域には現在の自衛隊駐屯地方向から浅い谷が刻まれており、境川とつながっていた可能性も指摘できる（地図1.3.1の A）。加えて中心域の南北両端には平田川と朝見川も流下している。別府中心域はこれら河川から運搬された土砂が主体となって扇状地状の地形が形成されている。地域全域から大きな岩石が掘り起こされることから、両河川の運搬力の強さと、この地域を取り巻く火山域の活発な活動が想像できる。このように、現在から100年ほど前の別府市の地形は原地形がさらけ出されていたと考えられる。

土地利用の状況を見ると、扇状地地形の中央部は地図上ではその疎密は判明できないが雑木林的な状況であったようである（図1.3.2の B）。水田は扇状地の湧水が利用できた豊後街道と別府湾の間の他には、海岸から鉄輪地区に至る地域にも見られ、鉄輪地区周辺の水田は海岸に至るまで棚田が広がっていたと考えられる（図1.3.1の C）。また水田は扇状地の末端部（扇端部）から海岸にかけての地域に分布し、この扇端部には湧水帯が分布していたと見られ、水に関わる神社（祠）が数箇所見られる（図1.3.1の D）。

一方、鉄輪地区は別府市中心域に広がる扇状地地形とは春木川によって仕切られている。この春木川から水路を引き農業を営んでいたようで、明治時代は未だ純農村の様相を呈していたと考えられる。当時の記録を見ても旅館業を営む者の大半は農業との兼業であった。訪れる客の大半が湯治目的であったから、客に食事を提供する必要も無く、また湯治の繁忙期は冬場で農作業の繁忙期とずれていたことなどから兼業が一般的であったと考えられる。

集落配置もこれら河川からの影響に配慮して立地している様子が伺える。すなわち、日出町から杵築・中津・小倉に至る豊前街道は扇状地状の地形の扇端地域に南北に伸びている。この街道よりも山側の土地利用ほとんど森林地帯を成し、海側は水田が広がっていることから、土砂が堆積する境界線に沿って街道と集落が立地していたと思われる。さらに、鉄輪地区からは別府湾（邯鄲の海）と高崎山が見渡されたとの記録も残っており、海岸まで続く棚田と海そして山の景観が見事に調和していたと考えられる。

他方では、鉄輪、堀田、南立石、中津留、観海寺、原、朝見といった集落は別府中心地域の南北端に分布する断層涯の麓に分布している（図1.3.1の E）。また、これら集落周辺には水田の分布も見られる。こうしてみると、土地の状態や水利といった諸条件の結果このような配置となったものであろう。

次に、当時の交通路の様子について見る。南北には前述した豊前街道が貫いている。これは今日でも「旧街道」として利用されている。その他、今日の「九州横断道路」の一部を成す由布院に至る道路は、中津留から南立石・

堀田を通っている。鉄輪地区と明礬地区を結ぶ道路は、海地獄からほぼ直線状で小道が通っていたようである（図1.3.2の A)。自動車での移動が一般的となっている今日ではこの小道はほぼ消滅している。明礬へは小倉・北中からの小道、さらに明礬から伽藍岳（硫黄山）の稜線を抜けて塚原に至る小道も地図上に明記されている（図1.3.2の B)。加えて、移動手段が徒歩の時代の特色として農地を縫うようにして集落間を小道が繋いでいたようである。しかし、これらの小道は今日でも拡幅され生活道路として利用されているが、その他の多くの小道は廃道かそれに近い状況下にある。明礬地区は山懐に孤立するように立地している。図1.3.2を見る限り車輪が満足に通行できそうな道路も記載されてはいない。下界に至る道は海地獄の裏手を通り鉄輪地区に至る小道が認められるだけである。明礬地区はその地名の通り「明礬」の産地として江戸時代は豊後森藩の領地（飛び地）であった。当時はこの明礬生産という特殊な地域性ゆえに別府市中心域とは支配版図も異なっていた。

図1.3.1　明治末の別府市中心域の様子

陸軍測地部５万分の１地形図「湯平」「大分」明治38年（1905）発行より筆者作成

また、後に鉄輪はおろか別府観光を支えることになる地獄は、当時水田の中にそれぞれ孤立して点在していたようである（図1.3.2の C)。大雨の時には地獄に溜まった雨水が溢れて大変な被害を被ったと言われているが、地図を見た限りではこの状況を想像することは難しいことではない。

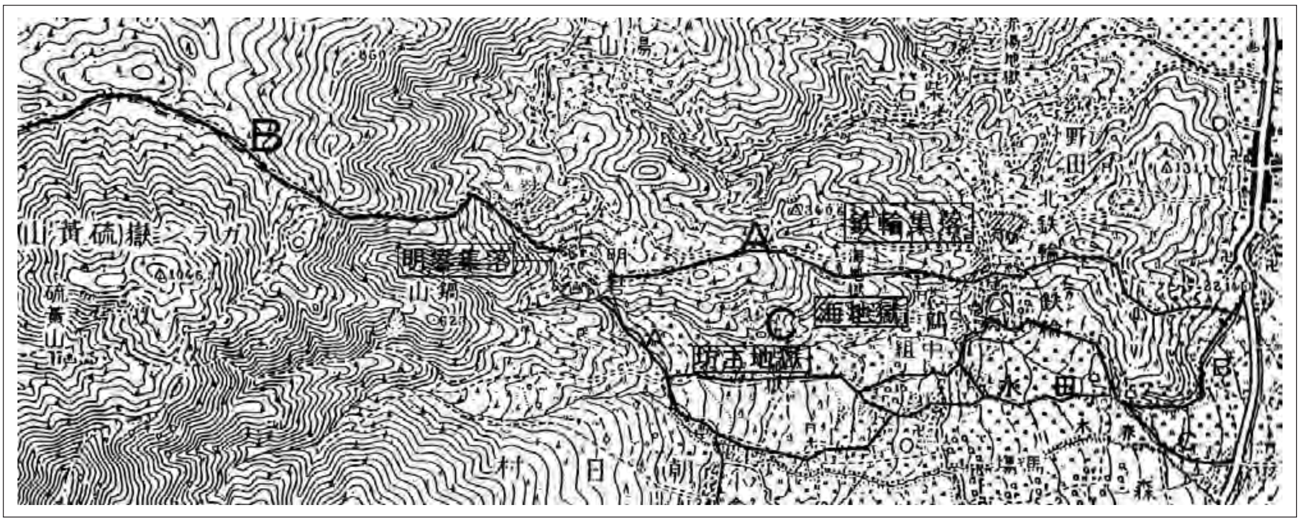

図1.3.2　明治末の鉄輪・明礬地区の様子
陸軍測地部５万分の１地形図「湯平」「大分」明治38年（1905）発行より筆者作成

２　温泉観光展開期（昭和２年（1927）頃）の地域構造の変遷

昭和初期の様子を見ると、前項で示した明治38年と比べると地域の変貌ぶりは図1.3.3でも数多く示されている。先ず、鉄道が敷設されており、さらに道路網も整備が進んでいることが示されている。鉄道は旧街道よりもさらに海側を直線状に敷設さている（図1.3.3のA)。これは、当時の幹線鉄道は輸送力を上げるために極力直線的に敷設されていたとことが挙げられよう。その他の背景としては鉄道による水路の分断の影響を最小限に留めようとしたこともあろう。

次いで、道路網の整備がこの20年間で飛躍的に進んでいたことが示されている。先ず目に付くのは鉄道よりもさらに海岸線に沿って道路が整備されている（図1.3.3のB)。さらに詳細は後述するが、亀川から柴石を経由して鉄輪地区を通り、そこから扇状地の中央部を道路が貫通し南立石まで至る道路が整備されている（図1.3.3のC)。また、平田川に沿って北須賀地区から鉄輪地区、そして小倉地区を経由して明礬に至る道路も整備されている（図1.3.3のD)。こうした道路整備は自動車の進出という社会的背景が大きいといえ、自動車通行が可能な道路によって鉄輪、明礬両地区は近隣地域と結ばれるようになっていったといえよう。その一方では、鉄輪と明礬を繋ぐ小道はまだ明記されており、地域住民は徒歩が日常的な移動手段であったことも伺うことができよう。

大正時代から昭和にかけて別府温泉は飛躍的に発展を遂げたが、鉄輪・明礬両地区はこれによって地域構造は大きく変貌を遂げている。第一に、道路の整備が挙げられる。前項においても指摘した「地獄巡り」遊覧バスが運行を開始し、後に詳しく述べるがその道路は皇太子（昭和天皇）のご巡幸に併せて整備されたものである。

さらに、目を引くのが別府駅周辺の街路が碁盤の目状に整備されていることである。これは明治末に実施された市区改正によるものである（図1.3.3のE)。市区改正とは今日で言う都市計画と同類のもので、後述するが当時の別府町は地方都市としては全国に先駆けて街区の整備を実行している。市区改正区域は別府駅の西側を中心として行われ、その範囲は原と中津留の集落に及んでいる。その他には実相寺山の北西部に位置する馬場地区の春木川畔にも街区が整備されている。ここは海地獄のオーナーとなった千寿吉彦によって「新別府」として開発された別荘地である（図1.3.3のF)。また、雑木林を開発して「鶴見園」が開業している（図1.3.3のG)。

前項の明治末から昭和初期の20年間で別府町の中心市街地が大きく拡大している。これは鉄道の開業による北浜温泉の発展を物語っている。また、扇状地の中央部の新しい道路沿いにも新たに集落が形成されている。さらに鉄輪地区の温泉街も広がっている。両集落ともに地獄巡り観光によって発展したものと思われ、その隆盛が読

み取れる。その一方で、明礬温泉は自動車通行が可能な道路は延びてきているものの、集落や土地利用の面は地図上では大きな変化は読み取れない。

他方、当時の別府は浜脇地区から北浜地区に及ぶ区域が最も栄えていた。既に両地区共に歓楽色の強い温泉街として確立されていたようで、両地域の中間に位置する松原公園界隈には芝居小屋や遊園施設が連なっていた。また、流川の上に造成された流川通りは当時の別府港と、未だ開園直後で地図上には記載されていないが遊園地ラクテンチを直線状に結び、旅館・土産物店が軒を連ねていた。

図1.3.3　昭和初期の別府市中心域の様子
陸軍測地部５万分の１地形図「湯平」「大分」明治38年（1905）発行より筆者作成

鉄輪地区の変貌ぶりは図1.3.4においても容易に確認できよう。すなわち、亀川地区から柴石温泉を経由して至る自動車通行可能な道路が山を縫うように整備されている。この道路は雑木林であったであろう扇状地中央部を抜け南立石地区に至っている（図1.3.4の A）。道路は鉄輪集落の西側のはずれに整備され、これに併せるかのように豊前街道から平田川に沿う既存の小道も拡幅されたようである。また、この拡幅された道路を延長する形で小倉地区まで新たな道路が雑木林を貫いて整備されている。さらに小倉地区からは既存の小道を拡幅して明

礬に至る道路も整備されている。これら道路網の拡幅と新たな整備によって、両地区には自動車の他馬車や人力車などが容易に乗り入れてくるようになったと思われる（図1.3.4のB）。

また、鉄輪集落は南側に大きく発展している。明治末の図1.3.2と比較してみると桑畑が展開していた場所に集落が拡張していったようである。こうして見ると、鉄輪地区の生業構造も大きく変化していたと思われる。水田は相変わらず周辺に展開しているが、雑木林や桑畑への開発が徐々に進んでいっている。加えて、道路網の整備によってこれまで小道でしか結ばれていなかった、豊後街道沿いの集落や亀川地区と道路で結ばれるようになっている。

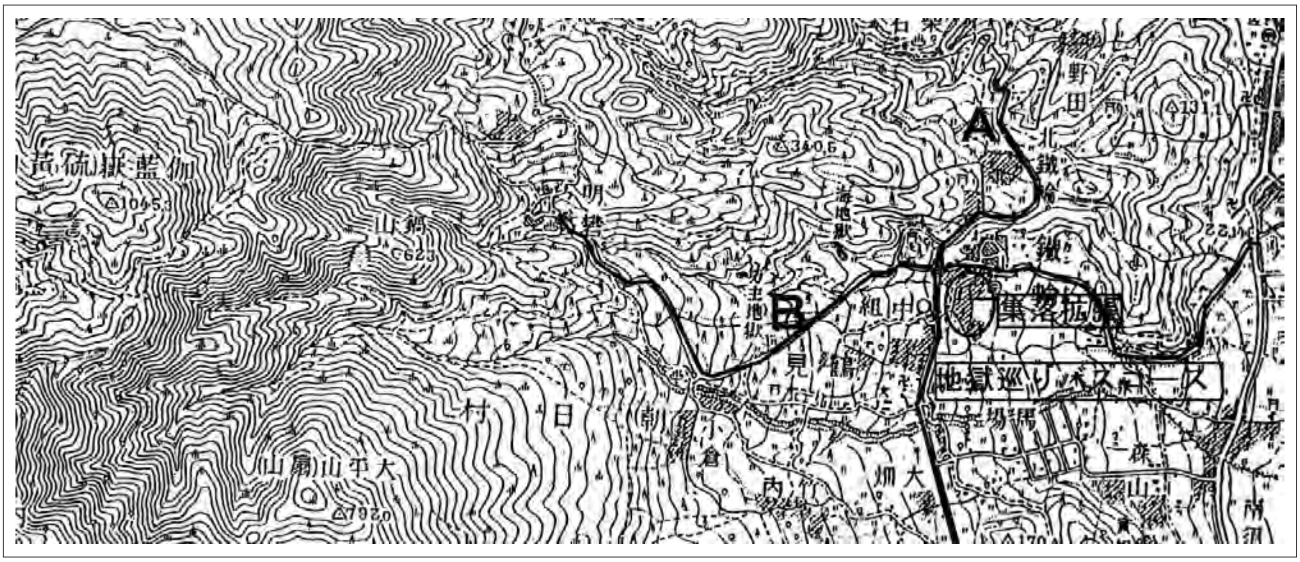

図1.3.4　昭和初期の鉄輪・明礬地区の様子
陸軍測地部５万分の１地形図「湯平」「大分」明治38年（1905）発行より筆者作成

３　高度経済成長期（昭和45年（1970）頃）の地域構造の変遷

高度経済成長期になると、別府市中心地域はこの地域を覆う扇状地状地形の扇端部、すなわち石垣地区の開発が進められた（図1.3.5のA）。しかし、当時の区画整理事業は石垣地区の東側（現石垣東町）に留まっていた。この開発はこの地区はかつて水田が広く分布していたが、高度経済成長期に大規模な宅地開発が行われた。図1.3.5においても、日豊本線の東西両区域において街路が碁盤の目状に整備されている。当時はこの地域に新しい国鉄の駅が開業する計画であったが、その計画は挫折している（図1.3.5のB）。

一方、中津留集落が大きく発展し国鉄別府駅から西側に展開する市街地と繋がりつつある。これは、一つに鶴見園を中心とした観光面と人口増加による市街地拡大が相まったものであろうか（図1.3.5のC）。また、これまで人の手があまり及んでいなかった扇状地の中央部分の道路整備が進んでいる（図1.3.5のD）。こうして、別府中心市街地と鉄輪地区との間は旧来の集落が拡張するとともに、新たな宅地造成も進められている状況が見て取れる。とりわけ、かつて地獄巡り用の道路として利用されていた鉄輪地区と南立石地区を結ぶ道路（鉄輪線）沿いおよび馬場地区の発展が目を引く（図1.3.5のE）。道路整備面では九州横断道路が開通している。

高度経済成長期には観光の大衆化が進み観光ブームが起こった。とりわけ九州横断道路の開通に伴い、別府観光は団体旅行を対象としたマスツーリズムが本格化するとともに、別府→阿蘇→熊本という観光ルートが確立し観光客の流動も大きく変化した。また、北浜地区では旅館の大型化が進み観光地としての地域構造が大きく変化したといえる（図1.3.5のF）。

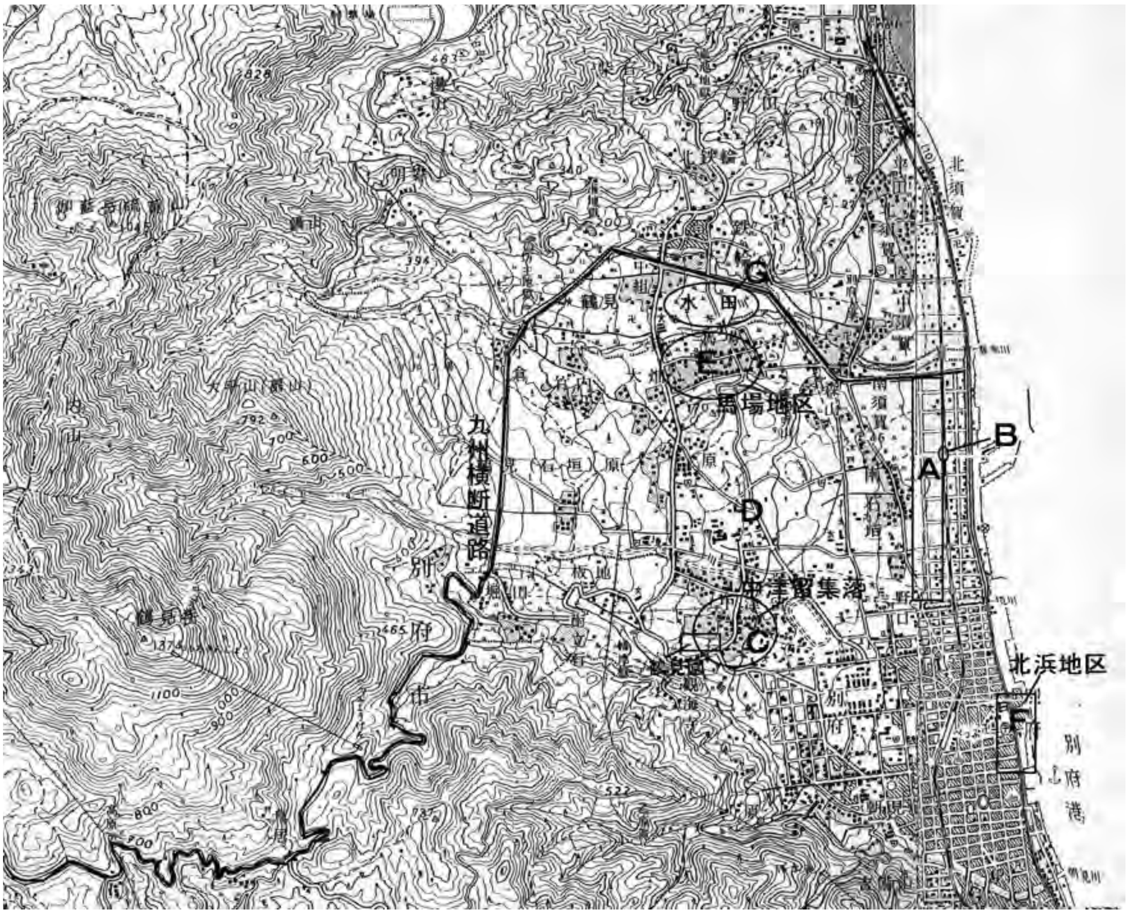

図1.3.5　高度経済成長期の別府市中心域の様子
国土地理院５万分の１地形図「別府」「大分」昭和45年（1970）発行より筆者作成

明礬地区においては自動車が通行できる道路は湯山方面に延びているが、小倉地区から明礬地区に至る道路は現在とは異なり、海地獄の裏手から登る道路が明記されている。しかし、この道路は現在では小道として表記されているに過ぎず、このことからこの時期においても明礬地区に至る道路の整備は遅れていたものと思われる。

当時の別府市中心域の土地利用状況をみると、石垣地区の区画整理や市街地・集落の拡大によって水田は大幅に消滅しまとまった水田の分布は春木川から鉄輪地区にいたる中組地区に見られる程度となっている（図1.3.5のG)。

昭和39年（1964)、戦前から構想が持ち上がっていた九州横断道路の開通は鉄輪地区の地域構造を大きく変えたといえよう。先ず横断道路は鉄輪集落の南側の水田を切り開いて整備され、これまで広がっていた農村景観を一変させたと思われる。図1.3.6を見ると、開通数年の時点で既に横断道路沿いに集落（町並み）が認められる。横断道路開通直後から鉄輪地区に加えて北浜地区などの旅館が道路沿いに進出したのであるが、その状況が見て取れる（図1.3.6のA)。また、その他の道路整備を見ると、昭和初期に整備された道路（図1.3.6のB）に加えて、鉄輪地区と馬場地区を繋ぐ道路も整備されている（図1.3.6のC)。この道路の鉄輪地区入口には現在大きな案内板が設置され、鉄輪温泉街の入口の一つとなっている（図1.3.6のD)。

鉄輪地区における地獄の分布を見ると、図1.3.6を見る限り「海地獄」と「坊主地獄」が記されているに過ぎず、今日の地図上に記されている「山地獄」「カマド地獄」「白池地獄」は記されていない。また、各地獄の周辺にはまだ農地が広がっている（図1.3.6のE)。このように発展を遂げる一方で、土地利用をみると集落の周辺に

は水田が広がっている様子が伺える。

一方、明礬地区について見ると、昭和初期には既に自動車や馬車が通じていたが、その道路が湯山地区まで整備されている（図1.3.6のF)。これは、大分国体の射撃会場となった湯山地区へのアクセスとして整備された側面がある。この道路の整備によって明礬地区への交通アクセスも改善されたが、高度経済成長期の大衆旅行ブームにありながら、横断道路の開通で発展した鉄輪温泉に大きく後れを取ったといわれている。

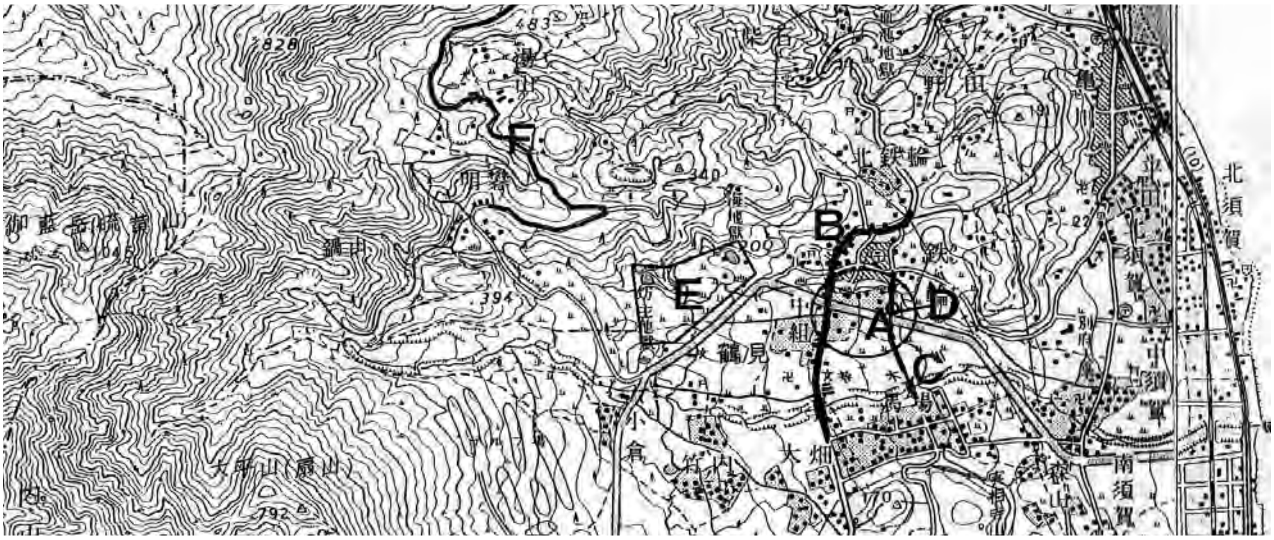

図1.3.6　高度経済成長期の鉄輪・明礬地区の様子
国土地理院５万分の１地形図「別府」「大分」昭和45年（1970）発行より筆者作成

４　バブル経済崩壊後（平成９年（1996）頃）の地域構造の変遷

別府市中心域は前項の高度経済成長期以降市街地は、JR 別府駅西口（山側）から北西方向に急速に拡大をしている。市街地は扇状地の中央部をほぼ埋め尽くし九州横断道路にまで至っている（図1.3.7のA)。その結果、かつては扇状地中央部分の雑木林で隔てられていた別府市の中心街地と鉄輪地区の温泉街はもはや同一の市街地となっている。これは前項で取り上げた石垣地区の区画整理事業による市街地形成ならびに、鉄輪地区と南立石地区を結ぶ鉄輪線沿線とその西方の扇山地区の市発展によるものである。

1988年頃から絶頂期を迎えたバブル経済期には、石垣地区を中心として高層集合住宅（マンション）の建設が相次いだ（図1.3.7のB)。分譲された物件はセカンドハウスあるいは投機目的としたものも多いと聞く。他方、高度経済成長後市内各地には企業・団体の保養施設も相次いで整備されたのだが、バブル経済の崩壊によってこれら施設の多くは廃止された。その跡地には小規模な宅地造成が行われ、新別府地区ではこの地域を象徴する300坪単位の区画が切り崩されつつある（図1.3.7のC)。

バブル経済とその崩壊によって別府市中心域の地域構造は、高層マンション建設に伴い、観光客と地域住民というこれまでの構図に加え新しい住民の流入が見られ石垣地区などは新たな機能が形成されたといえよう。さらに、扇状地中央部に新たに形成された市街地は住宅地としての機能を持った。このように、別府市中心域はこれまでの温泉観光地という機能に住宅都市機能が拡充されたといえよう。

他方、道路交通では高速道路（大分自動車道）が開通している（図1.3.7のD)。さらに別府インターチェンジも開設され、交通アクセスの流れはインターチェンジから市中心街という大きな流れが形成された（図1.3.7のE)。鉄輪地区は九州横断道路沿いがさらに発展し、高度経済成長期に進出した大型宿泊施設のみならず、商業施設も展開し今日では生活道路としての機能が前面に出ている（図1.3.8のA)。さらに、地獄の表記も「海地獄」「坊

主地獄」に加え「鬼石坊主地獄」「白池地獄」「カマド地獄」「山地獄」「鬼山地獄」も新たに表記されている（図1.3.8のB)。

図1.3.7　　バブル経済後の別府市中心域の様子
国土地理院５万分の１地形図「別府」「大分」昭和45年（1970）発行より筆者作成

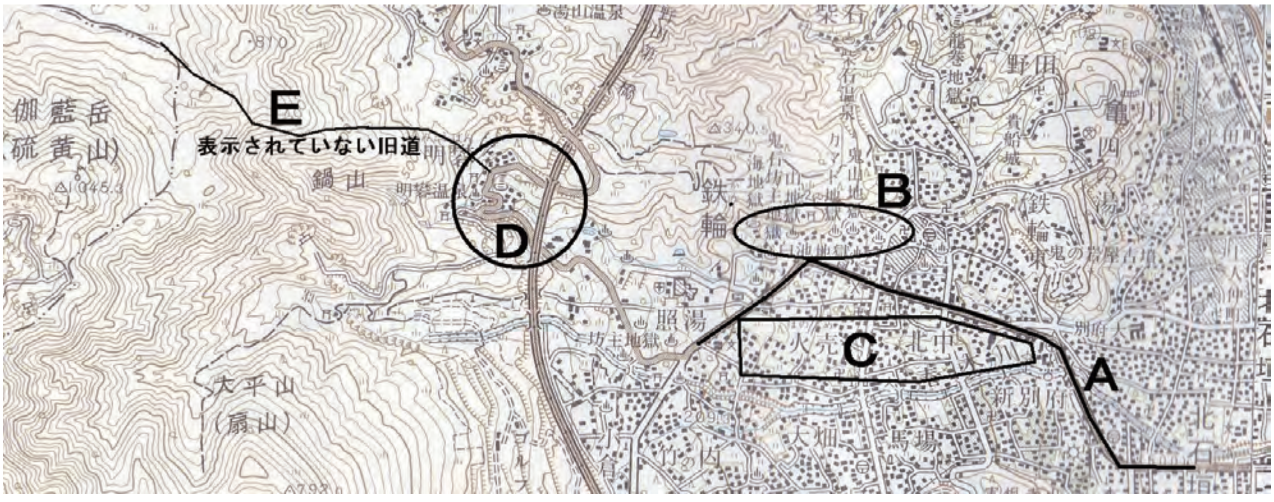

図1.3.8　バブル経済後の鉄輪・明礬地区の様子
国土地理院５万分の１地形図「別府」「大分」昭和45年（1970）発行より筆者作成

さらに、高度経済成長期にはかなり分布していた水田は大幅に減少し、開発（宅地化）は街路沿いからその裏手に広がっていく過程が見て取れる（図1.3.8のC）。

こうしてみると、鉄輪地区は観光温泉地域という機能を維持しながらも、別府中心域の市街地拡大に伴い都市生活空間としての機能も加わっていった。

明礬地区は、先ず道路が拡幅整備された（図1.3.8のD）。前項の図1.3.6を見るとこれまでの道路は明礬集落を貫通する形で湯山方面に登っている。この道路は現在も残されているが、集落内は幅員の極めて狭い小道である。一方地図1.3.8を見ると、新しい道路は集落の西側斜面を取り巻くように延びている。また、図1.3.3までは表記されていた伽藍岳を越える峠道（旧道）は全く表示されておらず、もはや登山道としての役割も殆ど果たしていないのであろう。

5　地域構造の変容

これまで地域構造の変遷を見てきたが、ここではその変遷をまとめながら、その変化について模式図で表してみたい。

（1）地域構造の変遷まとめ

【明治～大正時代】

各集落は孤立的に立地し、それぞれが独自に展開しており土地利用も自己完結型の様相を呈していた。

こうした地域構造は近世時から続いてきたと考えられる。この時期に温泉が観光資源として価値を持ち始めたが、基本的にはこうした地域構造は大きく崩れることはなかったと思われる。それは、未だ観光資源という価値とアクセスという移動手段が連携して「観光地」という新たな価値という概念が形成されていなかったといえる。

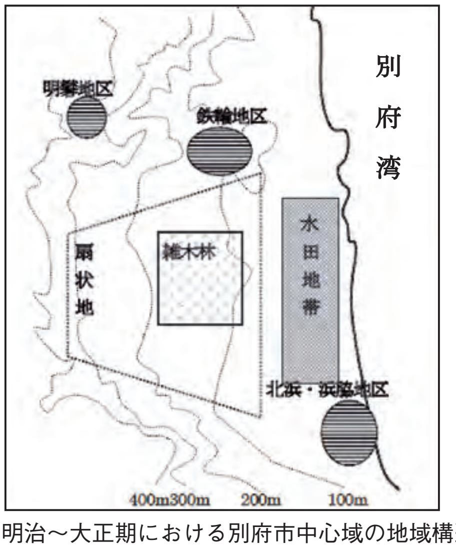

図1.3.9　明治～大正期における別府市中心域の地域構造模式図

【大正末～昭和初期】

別府市においてこの時期が最も地域構造が変貌したといえよう。先ず、自動車通行が可能な道路によってこれまで相互のアクセスが無かった鉄輪地区と北浜地区とその周辺とが結ばれた。しかもこの道路は「地獄巡り遊覧バス」のルートとして利用された観光道路といえ、それによって各集落が繋がったという点は、地域構造の形成上如何にも別府らしい特性といえよう。

また、野ざらし状態にあった各地獄が観光資源化していったのもこの時期である。しかし、地図で見る限り後述するような遊園地化の様子は伺えず、鉄輪地区周辺の地獄は農地の中に点在しているように記されている。

全体的にみると大きく地域構造も変化したのであったが、明礬地区は地域の一要素としてみるとその位置づけは大きく変わってはいなかったようである。その一方で、明礬温泉の賑わいを記す記録が数多く残されており、地図上で検討する地域間の相対関係から見る別府中心域全体の地域構造の中では大きな変化が認められない中で、温泉地としての価値観を高めていったことは地域特性として注目すべきであろう。

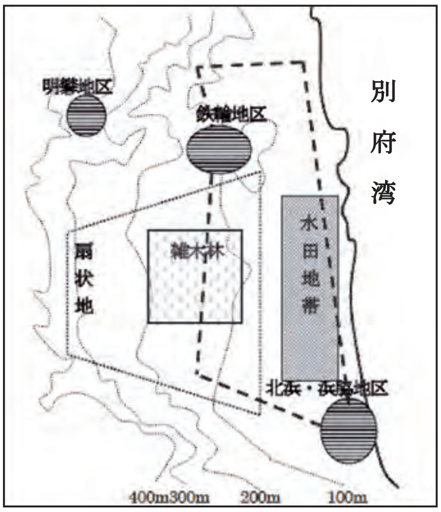

図1.3.10　大正末期～昭和初期における別府市中心域の地域構造模式図

【高度経済成長期】

高度経済成長期になると、別府市の地域構造は九州横断道路の開業による観光機能の拡散と、都市機能という新たな側面が加わった時期であったといえよう。つまり、九州横断道路の開業は別府が初めて周辺観光地といわゆる周遊ルートで結ばれたのである。したがって、別府市の地域構造は他地域との相互関係の中で位置づけなければならない。また九州横断道路は、その後生活道路としての機能も大きくなり鉄輪周辺の横断道路沿いには商業施設が立地していくこことになる。

さらに、観光地でありながら観光とは異なる機能も加わった。つまり、かつて雑木林が分布し別府市街地と鉄輪地区とを分断していた扇状地中央部に市街地が拡張したのである。また、水田が広く分布していた石垣地区では新たな観光都市として開発する区画整理事業が実施されたが、結局計画は頓挫しその後住宅地として軌道修正が成された。

また、周辺地区とのアクセスが不十分であった明礬地区も道路が整備され、地域全体の中において他地域と同等の条件が整ったといえよう。

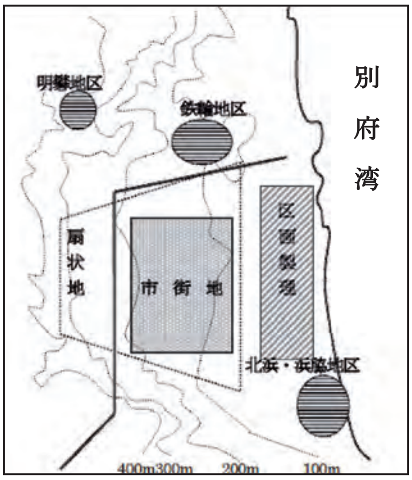

図1.3.11　高度経済成長期における別府市中心域の地域構造模式図

【バブル経済後】

バブル経済の最盛期の別府市は、他の観光地のような大型観光施設の開業は見られなかったものの、温泉地という地域特性はリゾートマンション開発という形で利用された。こうした開発は石垣地区で顕著に見られた。しかも、全国各地でバブル経済の崩壊によるリゾートマンションの売れ残りや建設途中の頓挫という事態は見られなかった。今日では開発されたマンションの多くは分譲・賃貸され、都市機能の一要素として位置づけられる。

九州横断道路は別府市内ではほぼ完全に生活道路として機能しているといえよう。沿線には商業施設が立地する一方、高度経済成長期にみられた宿泊施設の進出は、結局鉄輪地区と小倉地区に見られただけであった。

さらに、大分自動車道路が開通し高速道路によって福岡市と直結されるようになり、別府市の地域構造は交通流路という側面から大きく変貌したといえよう。つまり、自動車による観光客が大半を占める今日高速道路のアクセスというのは地域構造に非常に大きなインパクトを与えるのである。今日連休の夕方ともなるとインターチェンジに向かう自動車が市街地から数キロ渋滞することも珍しくない。

こうした、高速道路と自動車アクセスの一般化という事態によって地域構造は一変し、このことは市街地の地域構造（都市構造）に今後大きな影響を与えることは必至と思われる。

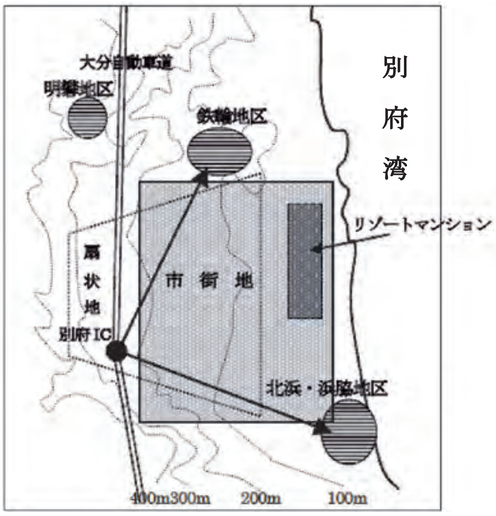

図1. 3. 12　昭和～平成期バブル経済後における別府市中心域の地域構造模式図